

令和4(2022)年「正覚寺報」5月号

お知らせ

オミクロン株は無症状の子供から父母に感染する厄介さがありますが、足取りは遅くとも着実にピークアウトの道のりにあります。

子供たちが主体の五月二十一日予定の正覚寺の降誕会(ごうたんえ)実施の是非は、佛壮お聴聞の会で念の為の最終確認をして戴きます。

記

5月1日(日)19時半 佛壮 お聴聞の会

5月21日(土)13時半 降誕会

仏婦例会は、降誕会に合同開催とします。

本願招喚の勅命をお聞かせに与ること

「声」は、旧字体では、「聲」と書くんですか」とある日、坊守から問われた。

「そうや、声に出して、称えせしめ、その耳に聞かしめずばおくまい」と如来様のお心を頂戴することができる。「字体の上部の右半分

」は、字画の「となえ」と読むと漢和辞典で教えられた。だから、「聲」は、如来様の思召しに「さようか」と頭を垂れ、口に称え、本願招喚の勅命をお聞かせに与って如来様に聞遇する姿になると頂戴できる。嘗て龍谷教学会議の研究発表の場でご紹介したエピソードである。大勢のご専門の和上様方がいらっしゃった会場だったけれども、どなた様からもその点にご異存を差し挟まれることがなかったことを思い返している。

坊守の問いは、嘗て私自身が伝えたいと思って話した言葉が何かの拍子に蘇ったものである。それ故、住職は、何年来の伝えたい心を坊守から聞く慶びに恵まれた。

発表の日の夕べの懇親会で、虞れ多くも正覚寺で誕生した仏教讃歌「ふとあおぎみるおすがたは」をご紹介したところ、本質的なご異存は差し挟まれることがなかった。

その一番の歌詞は、

「ふとあおぎみる おすがたは
救いの御名の ほとけさま
されば、六字となのらして
称えてご覧と 勧めます」

大行釈のお心である。

爾来、毎年の教区内親鸞聖人讃仰布教大会の御法座の締めくくりに会場の坊守様にエレクトーン演奏でご披露戴きお聴聞の皆様とご一緒に慶ばせて戴いている。

お正信偈で第十七願の諸仏称名の願を「本願の名号は正定の業なり」と頂戴しただけでは、聲になってお聞かせにあずかる本願招喚の勅命に聞遇できない。だから、親鸞聖人は、敢えて大行釈を設けて「大行とは無碍光如来の名を称するなり」と仰せ下さったものと窺われる。「無碍」とは、私のはからいなくして仰せの通りに聲に出して称えさせて戴くお念仏である。

りびんぐらいぶず 4月第一号は、「南無阿弥陀仏を称えれば勅命となってお聞かせ戴くお名号は、如来様から本願力回向されたお念仏(大行)を賜って行ずるとき初めて衆生の上で働いて下さるものだったのです」と謳わせて戴いたのは、その当たりの事情を物語っている。

ところがこれを長年布教に取り組んで戴いている布教使様から「本願力回向(先手のお救い)を丁寧にお話しないと聞かれた方が「称える お名号が働き出す」と受け取られる危なさがある」と指摘された。

これは、折角分かり易くお伝えしているのに、聲になって働いて下さる方便法身の働きを「自力他力」の次元でとらえ直した無用のはからいと窺われ、ご本山表のご常教が布教使ご自身に染みつけた現実であると見ないわけにはいかなかった。合掌。